
名探偵さやか

水乃ヘルギ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

名探偵さやか

【Nコード】

N0312A

【作者名】

水乃ヘルギ

【あらすじ】

現代ものなんてあんまり書かないから、珍しいでしょ。さやかは名探偵。頭もいいし性格も……。ある意味最強。そんな彼女の相棒ヨハン。ちょっとあほなこの男、キレものさやかと、どう事件を解決するちゅーねん!?

登場人物

うお、なんじゃこりゃ!?

タイトルからして、まあまあまあ……………。
て、あ きさやかじゃないよね? 笑

「いいえ、ぜんぜん。それはナッシングです!」

言い方までそっくりじゃん……………。

さやか、あなどるべからず、です。

彼女は成績優秀なお嬢様。

なのにスケ番……………。

人間、どんな裏があるかなど、わかりませんねえ。

相棒は、どじな警官、ヨハン。

ドイツ人です。

典型的なハンサムがなぜ、おそろしい(じろりと睨まれる)
……………いや、かわいいおじょうたまに……………。

「それはな。俺が美しいから、さやかがベタ惚れなんだよなー。ひひひ」

お前、変態!?

チューリヒだかフランクフルトにもどってしまえ!

「俺の田舎はデュッセルドルフだよ……………」

うっ、切腹! 汗

【栗源さやか】

これで、くりもと、って読むんです。
変換キーで知りました（笑）。
それもたった今。

「私自身ねたですから、残念！」
の境地です。

さやかは十七歳。

女子高生探偵ってところ。

お父さんは警察署長やっていて、お母さんはいません。
そしてなぜか、探偵。

いい地域だな、おばちゃん、うらやましいぞお。高校生が探偵業で
ぼるもつけなんて……………（違！

【ヨハネス・アウレリウス】

ラグナ・アウレリアっていれそうになった（汗）。

通称がハンス、またはヨハン。

さやかはヨハンって呼んでますね。

……………猛毒の霧はいて（汗）。

ヨハンは留学生だったところから、さやかの家に下宿させてもらっ
ていました。

就職して警官に。

もちろん定住ビザとってますよ！

というのよね、さやかの婚約者だから……………。

歳は二十二歳。

でも言動が変なやつ。

【栗源幹吉】

両 勘吉か？

さやかの父。とっても子煩悩だった時代から一変し、今では厳格なお父様に……………。

登場人物（後書き）

いや、その、コメディイなんてはじめてかも。

推理系というよりこっちのほうが強いから。

でもポワロとマープルはたまに……（グハ！
む、むかしは推理マニアだったんだじょ）。

ブルーダイヤ

「ちよっ、ヨハン。ちよっときなさい！」

夕方、学校から帰ってきたさやか嬢、ヨハンを自室に手招きした。

「あん？　なんだよお、エッチならあとで……」

さやか、軽やかに右足を上げて、さりげなく舞い、ヨハンのあごを蹴り上げる。

「ちやうやろっ！　こいつを、あ、みいやあがあれえ」

さやか、歌舞伎調でマウスをクリック。

泣きべそをかいたヨハンは、いまだうずくあごを押さえて、画面を食い入るようにみた。

「うん！？　なんだこれ。オークションじゃないの。なにににい？

さやかちゆわん。これほしいってことお？　でもなー、署長に言わなきゃね。給料をあげ」

「て、そーじゃない！　ここみてよ、こっつ」

拡大ボタンを何度も押すさやか。

「あ」

「けらけら、ばっかじゃねーの、クリックしすぎて縮小図に戻してヤンの。けけけ」

さやか、くやしくなってヨハンの胸板をぼかすか殴る。

「やかましい、だかましい！　もういい、あんたなんか頼まない！」

「じよ、冗談だよ。頼みたいことって？」

さやかがもう一度画面をクリックすると、大きなダイヤモンドが映し出される。

「すげえ。ブルーダイヤ？　めったにないんだろっ、これ」

「ここにね、クリモトってあるでしょ。あれ、お母さんの形見なの。

いったいどうしてかと思って、不安になったんだ。 なんだか胸騒ぎして」

ヨハンは画面から目を離さないさやかに微笑みながら、肩をたたいた。

「へえ、お母さんのか。だったら絶対、取り戻さないとす。いったいいくらで買える？」

「……三億の値段がついてる」

「なあんだ、たった三億か。へらへら」

さやかは首をひねってヨハンをみた。

「たったのつて、あんた……三億つていくらだと……」

いくらなんでも値段くらいはわかるだろうと、さやか。

「……ええええええええっ!? さささ、さっ、さんっおっぐっ」

さやか、やつぱりねとため息をついた。

「はあ、難しいでしょ。でもそれより犯人はだれなわけ? こんな大事なダイヤを売り飛ばすなんて」

「署長だべ。だって奥さんの」

「じほん」

父、幹吉が部屋の外からヨハんとさやかを監視するように咳払いし、自分の存在を知らせた。

「お、おお、おとうさまっ」

「ごきげんよう、ヨンさま」

いやみに言っつてヨハンを押しつけ、さやかを叱る。

「嫁入り前の娘が、男を入れるんじゃない」

「だってパパ。ヨハンは勝手に入ってきたんだもん」

ヨハンは血の気が引いた……。

「ヨンさま。あとで下の居間まで、いらっしやってください」

「う、ウソよパパ。ヨハンは悪くないっば!」

うちの父親は冗談も通じないと、さやかは頭を痛めていた。

「ヨハンはかわいそうに、正座の刑……。」
「足いってえよお〜」

名探偵さやか

ブルーダイヤ（後書き）

こんな始まりでいいのだろうか……。

雷オヤジ

さやかの家は厳しいというわけではなかったが、警察署長の娘としてのプライドを養うため、合気道、剣道、柔道からはじまって、ピアノ、ヴァイオリン、フルート、コーラス、進学校。

スケジュールどおりにこなすことが日課だった。

そんな時、さやかは『車輪の下』の主人公ハンスに同情するのだった。

「車輪の下？ ヘッセじゃないか。俺も好きだよ」

恋の始まりもヘッセだっけ、とさやかは回想する。

ヨハンとの出会いは図書館だった。

彼と会う回数を重ねるうち、彼に惹かれていく自分に気づいた。

そしてヨハンが家賃滞納でアパートを追い出され、困っていると聞き、さやかは父を拜み倒してようやく、同居させてもらったが、ここで間違いが生じてしまった。

ヨハンはずっかり、さやかと一晩過ごしたのである。

「パパとのお約束、第一条！ 男を部屋に入れないと誓ったではないか！」

おとうさま、雷を落とすし、真つ黒焦げにされたヨハンは無理やり、さやかの婚約者にされ、就職先も自分の仕事場にと決めてしまったのだった。

「まったく、ふるくせえオヤジだぜ」

とさやか。

普段学校ではスケ番だったので、タバコは吸うし、酒もがぶ飲みした。

「おい、またきてるぜ、あのイケメン。さやかのこと狙ってるんだ」

さやかはそのイケメン男を見つけてビールを吹き出した。

「なにやってんだ、ヨハンのやつ！」

「ああ、なんだ。彼氏かヨ。隅におけねーな」

「ま、まっつて」

さやかはよろよろと立ち上がり、ヨハンにつっかかった。

「どういうつもり？ 学校には来ないでよ」

「すまん、すまん。だつてさあ、早めに言っておこうと思って。あのブルーダイヤなんだけど」

「……うん」

ヨハンがポケットから紙切れを出し、さやかに渡した。

「あのダイヤ、ルミナル反応がでるかもしれない……」
「えっ」

さやかは眉をひそめながら尋ねた。

「知ってるよな。血痕反応だ」

「も、もちろん。でもなんでそんな」

「さあ。いずれにしても、オークションで何かつかみたいな。俺もいやな予感してきた。あのダイヤは、ある事件の重要な手がかりになるかもしれない……」

さやかはいつになく引き締まった顔のヨハンに惚れ直し、ぼうつとなっていた。

「どうかした？」

「ううん。仕事、今日は遅いのかなと」

「だろうね、調べなきゃならないことが山積みだし！ でもちゃんと門限は守るから」

おとうさまは、ヨハンが浮気しないようにと十二時を門限に決めてしまったのである。

さやかに触れさせない、しかも浮気禁止で門限つきという最悪なルールにしばられたヨハン。

それでも愛しているといってくれるが、いつたい、いつまで彼の愛情は続く（もつ）のだろう、とさやかは不安だった。

「あんたもあの人も、苦労人だねえ」

ともだちの英理子が、さやかの肩をたたいた。

「えりちゃん」

名探偵さやか

おいおいと泣き出すさやか。
早く家を出たいと、心に誓っていた。

雷オヤジ（後書き）

だめですねえ。

こんなお約束オヤジは……。

浮気三昧で愛人作り放題ってのも困るんですが。

哀愁オヤジ

「ダイヤで人を殺せるんですか」

ヨハンが幹吉に尋ねた。

「まあな。方法によつては。しかしあくまでも可能性の話だよ」

「あのブルーダイヤの大きさなら、私もありうるとは思つのですが」
署長はうなずいた。

ヨハンはドイツ人だから、敬語と砕けた語の使い分けを知っている。

アメリカ人の横柄な態度とは違って、ドイツ人はさまざまな認識力を伴うのである。

戦争に負けた日本と同じ境遇を持つ国。

ドイツと日本は、価値観が似ているというものもある。

そのため、さやかの父はヨハンに感心することが多くあった。

さやかとの婚約を決めたのは強引だったかもしれないが、今にして思えば正解だったのではないかと。

「ヨハン」

ヨハンは部屋を出ようと、ドアノブに手をかけたが署長に呼び止められ、振り返った。

「娘をこれからも、よろしく頼む………。それから、門限はなしでいいぞ。以降は、羽目をはずしたまえ」

「……署長。急にどうしたんですか」

ヨハンは引きつったように笑う。

何かたくらんでるのではないかと、急に不安がった。

「ヨハン、さやかはああ見えて、もろい神経の持ち主。お前になら、とおもつてな」

「はあ………」

ヨハンは視線を泳がせた。

どうするべ、落ち着け、ヨハネス！ 落ち着くんだ！

「わしは、お前を気に入っているんだよ」
いつもの署長らしくなかった。

ヨハンはまじめな表情をして幹吉に視線を釘付けする。
「歳はとりたくないものだな。成長していく娘を見るのが、とてもつらいんだ。お前も父親になればわかるだろうが、娘の成長する姿ほど、つらいものはない」

ヨハンは返事に困ってしまい、うつむいていた。

「すまないね。引き取ってくれ」

「は。では失礼……」

ヨハンは廊下に出ても考え込んでいた。

ダイヤと、署長と、その言動と。

何かが引つかかる。

もしかしたら、この事件の終着点につくころ、さやかを傷つける何かがありそうだな、そんな予感さえしていた。

名探偵さやか

哀愁オヤジ（後書き）

オヤジ主流か、この物語・・・。

ヨハン、悩む

「あれね、私も調べたよ。いまいち、情報不足でつかめなかったけど」

ヨハンが風呂からあがると、発泡酒を渡すさやか。彼は酒を受け取る。

「いいの？」

食器を洗いながらさやかがヨハンに尋ねる。

「いいの、つて。なにさ」

「おとうさん、遊んできてもいいって言ったんじゃない？ じゃあなんで、飲みにも行かないのかなとおもって」

「知りたい？」

タオルで手を拭いて、さやかは洗い終わった食器を並べる。

「べつに。たいしたことでも、なさそうなもの」

「ひどいなあ。……言っちゃうとね。俺、さやかとはできるだけ一緒にすごしたい」

さやかは頬を赤く染めた。

「赤くなつたでしょ。かゝわいいねえ」

さやかはヨハンから酒を取り上げると、一気に飲み干した。

「ああ、俺の！」

「私も、ヨハンと一緒に、いたい……」

さやかはヨハンの隣に腰掛け、彼の胸に頭をあてがう。

「こうするだけでも、怒られたのにな。もう解禁なんだよね？」

「まだ俺、お父様のこと、怖いよ……」

さやかを手で拒む。青ざめるところ、ヨハンはホントにかわいそう、とさやかは思った。

「ヘルマン・ヘッセのお父さんも厳しかったんだって。それに、イマヌエル・カントの父も。プロテスタントとかピエ……なんだっけ。みんなそうなのかなあ」

「今までが今までだっただけに、俺、こわいんだよ。急にやさしくされると、なんか裏がありそうな気がして。まだこんな風にするのは、やめておこう」

「ああ、それは……あるね……。でもだいじょうぶじゃない……」

「だから」

「だから？」

「ひとりしておいてくれる？」

えっ、とさやかは声を上げた。

その瞬間、ヨハンはさやかを押しつけて部屋に引っ込んでいってしまった。

「ちよつと。何よそれ……」

さやかは五本開けていたため、すでに泥酔状態。

「うそつきー。あけるお。今夜は飲み明かすんじゃないのかよー」
ドアを蹴ったりたたいたり。

ヨハンはベッドに転がって、幹吉の様子を何度も思い出していた。

父親というのは、娘の成長する姿を見るとつらいのだよ。

その言葉の奥になにが隠されているのだろうか。

ヨハンはそれだけが心残りだった。

ヨハン、悩む（後書き）

ヨハン、お父様嫌いらしいですねえ。
あ、じゃなくて、こわいのか 汗

まさか。

さやかはノートパソコンを開き、例のブルーダイヤモンドの項目を開く。さやか、ダイヤモンドの値段を見て、大きく目を見開いた。

「う、五億円！？ どういうこと」

どう考えても急すぎる値段の吊り上げだった。

物好きだったらやるかもしれないが、値段の上げ方には確か、ルールがあるはず。

「昨日見たばかりなのに………たった一日で二億も。うっそでしょ」

誰かがふざけて出品したとか思えない。

あるいは存在しないものなのか。しかし、栗源の名前が彫られているからには、間違いはなかった。

いくらネットオークションでも、ないものは売らないだろう。ためしにと、さやかは『買う』の項目にチェックした。

さやか、買う欄にチェックした後、思い出したことがあった。

もしかしたら、ルミナール反応が出るかもしれないな。

といったヨハンの一言である。

なぜ血の跡があるとわかったのか。

現代の科学捜査なら簡単にわかるかもしれないが。

それとヨハンがある事件の証拠といったことも、さやかは知らなくてなるまい。

さやかは、ぴんとひらめいてしまった。

「まさか、お父さん……」

さやかはパソコンを閉じると、部屋を出て行った。
時刻は黄昏どき。

ヨハンと父が戻ってくる時間だった。

「買い物しないと……」

いいながら、さやかはなぜだか、泣きたい衝動に駆られてしまっ
た。

名探偵さやか

まさか。(後書き)

名探偵としての実力発揮か、さやか！
それにしても、事件の顛末、気になります。

別れの夜

さやかは真相に気づいてしまい、父と顔を合わせることもなくなり、ヨハンは気を遣ってさやかを慰めるものの、ふさぎこむことが多かった。

ヨハンは家にいづらいためか、門限を解かれたこともあって、午前様の生活を送るようになっていった。

幹吉は何も言わなかった。

さやかも父のほうへ意識を集中させ、ヨハンの方まで気が回らないように。

ヨハンがほかの女といちゃついている、と友達から聞いても、ヨハンの気持ちが変わらないせいか、何もいえずにいたことも原因だった。

「おかえりなさい……」

夜中、父親とひさびさに顔をあわせたさやかだが、交わした会話は、それだけで終わった。

父はさやかから逃げるように、寝室へ向かう。

「待つてよ、パパ」

幹吉は、そのまま部屋に消えた。

続いてヨハンも戻ってきたので、さつきと同じで、

「おかえり」

と喋ってやる。

「水、くれ」

ヨハンの態度は、以前より横柄なものになっていた。

さやかはコップに水を入れ、ヨハンに渡すと、彼はのどを鳴らしてそれを流し込んでいった。

「ビール飲むと、のどが渴く」

さやかは何も言わずにコップだけ受け取った。

「さやかどうした。このごろ、何も話さないな」

ヨハンに言われ、大きく肩を揺らした。
驚いたのだ。

次になにを言われるかと、びくびくする。

「きみに言わなくちゃいけないことがあるんだ」

「いや……聞きたくない……」

何も知らないフリをすれば、さやかはそう思っていたのだ。

ましてや、すでに終わってしまった事件のこと。

もう、眠らせてあげたい死者がいた……。

「俺も戸惑ったよ。でも調べ上げつくしてやっと、たどりついた」

「言わないでったら！」

さやかは感情的になる。

それから……涙が頬を伝っていった。

「さやか」

「ヨハン。私といてもつまらないなら、出て行ってもいいし、好きにしまよ。でもパパには私しかいないから」

ヨハンは意外そうな顔をした。

「それ本気で言ってるのか」

「本気よ。悪い？ あたしよりいい女見つけたんでしょ。だったら乗り換えちゃいなよ。あたしとのことなんて、恋人ごっこだったんでしようから。だってあたし、子供だもん」

ヨハンは顔をしかめて、さやかを見つめる。

「俺、そんな風におもったことねえよ……」

「ウソばかり。年上のきれいなお姉さんが好きなんですよに」

「ウソじゃない。ドイツ人で珍しがられていただけの俺を、本気で好きだって言ってくれたの、さやかだけだったし……」

さやかを抱き寄せようとヨハンは、近づいてきた。

だがさやかは、誰にも触れてほしくなかった。

ある人物以外の男に……。

「私にはパパしかいないの……」

ヨハンは心臓が動かずに止まってしまおうのではないかと、思った

ほどだった。

さやかの言葉を聞いた刹那から、あきらめていたことがある。

「五つも歳が離れていると、だめなんだな。距離がありすぎて・・・」

ヨハンは、そのまま外へ出て行き、二度と戻ってはこなかった。

別れの夜（後書き）

ヨハンとさやか、別れちゃったのか……。
さみしいねえ。
でも真相とはいったい？

犯人は……………。

朝になるとさやかは父の勤め先に顔を出した。

そこには当然、ヨハンもいた。

だが、わざと気にしないようにつとめる。

ヨハンも同様だった。

何食わぬ顔で書類に目を通す。

ほかの刑事が、電話で署長を呼び出した。

「何、娘が？ わかった、すぐ行く」

幹吉は舌を打った。

「さやか、もしや気づいたか……………」

鍵つきの机の引き出しから、真つ青な宝石を取り出した。

ブルーダイヤである。

例のオークションで、五億の値がついたあれだった。

「さやか……………」

そして、机の奥から取り出した黒い塊　　ベレッタと呼ばれる拳

銃だった。

銃器類の中でも比較的使いやすいそれを、署長は持っていた。

「すまない。だがこうするしかないんだ。苦労して築き上げてきた

地位を、捨てたくはない……………」

そのダイヤを求めたのが娘であることも、実はうすうす感じて

いた幹吉。

ミナコ、というハンドルネームを使っていた。

それは、幹吉の妻の名前だった。

「美那子……………お前が悪かったのに」

「おとうさん」

さやかに向けられたベレッタの銃口。

父は、娘を殺そうと近づく。

「どうして……」

「わしがお母さんを殺したと、なぜわかった」

「鑑識でこの写真を見せたんですよ」

さやかの背後からヨハンがあらわれた。

幹吉は、ゆがんだ微笑を浮かべる。

「案の定、ルミナール反応が、でそうですね……」

「やめて、ヨハン。おとうさんを捕まえないで」

「でもさやか。まだ時効じゃないんだよ。お父さんはまだ」

ヨハンの言葉が終わらぬうち、署長は銃を発砲した。

「まだまだ！ わしはこの地位を捨てるわけには行かない！」

「往生際の悪い……」

ヨハンも拳銃を取り出した。

だが、そうするまでもないまま、署長は額に銃口をあてがう。

「ヨハン、娘をよろしく頼む……」

ヨハンをあわてて署長を止めた。

弾は撃ったが、運良く急所を外れて、全治三ヶ月の怪我ですんだ。

「さやか、怪我はない？」

さやかはヨハンに寄りかかって、呆然とし、泣くことも忘れていた。

父は母をブルーダイヤで殴殺したのだ。

そしてふき取ったものの、完全にはぬぐいきれず、わずかに血痕を残してしまい、鑑識に見破られた。

その結果、十年以上経って、事の真相が明らかとなったのだ……

皮肉なのは結婚記念日が今日であること。

母を殺害した日も、結婚記念日だったという。

「まさしく血痕記念日だな……」

ヨハンのしやれを、さやかが、

「寒いわ！」

と突っ込む。

「わからないのよねー」

さやかがつぶやいた。

「なにがさ」

「おとうさん、どうしてあんなに値段を吊り上げたんだらう」

「それは口を割らないみたいだね。おおかた、オークションで売りさばけば大金が転がるから、どうせなら限界まで吊り上げようとしたんじゃないかなあ」

「夢見させる！」

さやかが再び突っ込みを入れる。

「お母さんとの思い出が詰まっていて、本当はだれにも売りたくなかったんじゃないかな」

「夫婦なんて、そう甘いもんじゃないと思う」

ヨハンが笑った。

「わかった風なこというのね」

「きみを見ていたらわかるよ」

ヨハンのわき腹に、どぎついツツコミを忘れない、さやか。

「どういう意味じゃ、こんにゃろ〜」

「そのままです……でもね。お互いをわかりすぎたころ、憎むってこともあるんじゃないかな。お母さんはその犠牲にされてしまったんだよ」

「似合わない台詞。そういえば、私と、よりを戻すつもりなの？」

ヨハンがうなずいて、さやかにキスをした。

「うん、そのつもりだよ」

「なんか、いやな感じ。別れたままでもいいじゃない。ヨハンもてるんでしょ」

「どっちがいやな感じじゃ！俺はもてるって言ったって、好きになれる子はたった一人だけだからね」

へへん、とヨハンは勝ち誇った微笑を浮かべた。

「でも、あなたを好きで付き合いたいって人が多いと、私としては戦いたくないしね。ばかばかしいことに巻き込まないでほしい」

「……パパがすべてって言われたときは、傷ついた」

さやか、ヨハんに言われて思い出し、ぎくりとする。

「あ、あれはね」

「たとえ、いつときの感情でも、傷ついた。ぐすん、ぐすん。俺、かわいそうだよ。愛するさやかに捨てられちゃったんだから」

つきあつてられんと、さやかはタバコに火をつけて吸い出した。

「不良だなあ」

ヨハンは自分も火をつけて吸う。

「いいの、あたし未成年だけど」

ヨハンはぎよっとし、さやかからタバコを取り上げた。

「今日は見逃してやるが、この次やったら許さないぞ」

「許してたくせに。いつもビール飲んでるよね」

「あ……」

ヨハンは滅給を覚悟していたという……。

犯人は・・・・・・・・。（後書き）

人によつては、この無理やりなネタが好きです、とまで言ってくれる読者がいます。

うれしいですよ、そりゃ。

読んでくれる人がいてこそこの、ネタです（汗）

くだらない、と思う人もいるかもしれないけど・・・・・・・・。

PDF小説ネット発足にあたって
インターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連は横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0312a/>

名探偵さやか

2008年11月7日06時35分発行